

間着往々積滞ノ磊河ナルヲ見ルモ畢竟他ノ支川直チニ決河ニ滾瀉スル有リテ之ヨリ流送スル所ノ石砾モ亦夥多ナレハナリ

岩津ヨリ下流水面傾斜勾配ノ事

岩津ヨリ下流ニ於ケル水面ノ高低及傾斜ヲ記載スル所ノ表ナル附録第一ハ唯一面ノ水準測量及僅々七箇月半即明治十六年十一月十五日ヨリ同十七年七月ノ終尾ニ至ル只短小時間ノ水準觀査事ヨリ能ク斷メ得タルノ數ニ原ツク故ニ表中新製三千分一ノ縮図ニ照據セシ川線ノ長短ヲ除クノ外ハ植數皆以テ將來改善ノ起首數ト做ス可キモノ、此表ハ又夕明晰ニ上流ヨリ諸洲澳ノ上第十村ニ至ルノ間水面傾斜ノ殊ニ大ナルヲ示ス看ナリ

洲嶼及川口ノ事

吉野川流尾ニ攢簇セル諸洲嶼ハ第十村ヨリ海濱ニ至ル長四里余アリ又津田村ノ邊ヨリ撫養海峽ニ至ルモ廣幾ント四里余アリトス。畧圖ニ之ヲ示スカ如ク流尾ニ縱横スル派川ノ

ライラ
磊河、その多くかさなつて
滾瀉、合流する
夥多、おびただしい

傾、傾

サソク
攢簇、集ること

なく洲嶼の間に砂礫が堆積している。このことは、結局この辺りに集まっている他の支流より流されてくる砂礫も甚だ多いからである。

岩津より下流水面傾斜勾配のこと

岩津より下流の水面の高低と傾斜を書いた表（付録二）は、たった一回の水準測量とわずか七か月半（明治十六年十一月十五日と十七年七月末）の短い期間の水量調査により得た數量に基づいている。このため、新しく作製した三千分の一縮図に照合した川線の長短の他は、數値は將來改訂を要する起首數と見なすべきものである。この表は、また上流より諸洲嶼の上端第十村（石井町第十）に至るまでの水面の傾斜の特に大きいことを示すものである。

洲嶼及び川口のこと

吉野川（旧吉野川）の河口に多く集まる洲嶼は、第十村より海濱に至る四里余りの間にある。また津田村（徳島市津田町）の辺りより撫養海峽に至るまでおおよそ四里余りの幅がある。略圖にこれを示したように、河口に縦横に通じる派川の間、沖積土から成る洲嶼が数多くある。

※1 付録二
所在不明

※2 川線
流路の長さ

※3 略圖
所在不明

間ニ沖積土ニ成レル洲嶼ハ數多アリ。洲嶼ノ上面過半ノ地ハ猶上流ノ平地ニ於ケルカ如ク藍ヲ栽養スルノ畑トナレリ其他小部分ハ頗ル低ク而シテ恰モ稻ヲ耕スニ好シ然リトモ此低地ノ如キハ周圍愈々漸水ナルヲ以テ田地澱灌ノ為ニ引用スヘキ炭水ヲ得難シトスルノ一不便アリ

諸派川内及其川口ニ方リ砂土ノ泊積甚熾ナルカ故ニ舟楫ノ通行頗ル困難ヲ極ム。尚又津田撫養ノ両地間海濱ニ沿ヒ嵩高廣大ノ沙灘アリ一列ニ相接ス。時々高水ノ来リテ數多ノ通路ヲ沙灘ノ中ニ碇厠スルアリト虽凡平常ノ流水ヲ以テスル時ハ其力充分ニ通路ヲ開クニ足ラズ為ニ時々ノ川口時トシテ流水全ク不通ノ状態ニ至ルコトアリ。其川口トハ左ノ如シ

吉野川本流ニ八十丁乃至十二丁ヲ隔テ、左右ノ二川口アリ左ノ一口ハ低水下二尺ノ深サヲ保チ右ノ一口ハ低水下僅ニ一尺ノ深サヲ具フ。其右口時トシ波濤ニ衝激シ沖積セラル、ノ土沙ヲ以テ全シ壅塞ヲ致スコトアリ

今切川モ亦二口ヲ有ス然レモ互相碍タルコト前者ノ如ク遠カラズ。左口ハ低水下凡二尺五寸ノ深サヲ保チ右口ハ低

嵩高スウタカ！高タカいさいさま

洲嶼シマの少し高い所の大半の地は、上流の平地と同様に藍を栽培する畑となっている。残りの小部分は、大麥低い地で稻を栽培するに適している。しかしながらこの低地の周囲はほとんど潮水であり、田地灌溉のために引く淡水が得にくい不便がある。

諸派川内や川口に土砂の堆積が激しいために船舶の通行が極めて困難である。なおまた津田・撫養の間の海岸に沿い高く広大な沙灘ハマが一列に並んでいる。時どき、高水のとくに多くの水路を沙灘ハマのなかに開くことがあるが、平常の流れでは水路を開けない。このため所どころの川口には時により流れがまったく不通になることがある。その川口とは次のようなところである。

吉野川キノノカハ本流ホリウ（旧吉野川）には、一〇町から一二町離れて左右に二つの川口がある。

左の川口は低水下（干潮時）二尺の深さを保つが、右の川口は低水下わずかに一尺の深さである。その右川口では、時には波が激突するため堆積した土砂がまったく水路を塞ふさいでしまうことがある。

今切川もまた二つの川口がある。しかしながら吉野川（旧吉野川）ほどは、両川口が離れていない。左の川口は、低水時の水位下約二尺五寸の深さを保っており、右の川口は低水時に閉ざされているのを見ることがある。

※1吉野川本流：
以下七行については当時の状況を確認しがたい。

水ノ時ニ壅塞セルヲ認視セリ

別宮川ノ口ハ諸川口中ニ就キ川海両間航通ノ便最佳ナリ其故主トシテ川口内ノ至深ナルニアリ而シテ川口ノ外沙灘ノ上ハ千潮ノ深サ僅ニ四尺ヲ出デズ故ニ濤潮ノ深サハ凡ハ尺ナリ

津田川口ハ諸洲嶼ノ右地ニ廁ケリ之モ亦川口内稍深シト虽凡口外ニ於ケル沙灘ノ上ハ我カ親ヲ測查シテ其深サハ低水ト僅ニ一尺ニ寸ナルヲ知レリ。該川口ニハ桂川ヨリ土砂ヲ流送スルノ多キヲ以テ其壅塞ノ甚シキヲ察セリ

潮汐ノ事

海岸ニ沿フテハ各日二回ノ満潮アリ一回ハ頗ル高キヲ極メ一回ハ之ニ及ハズシテ去ル既已ニ其程度ヲ津田水位尺ニ試シ而テ得ル所ノ看左ノ如シ

曰々高漲ノ潮差ハ 三尺九寸一分
曰々卑潮ノ潮差ハ 二尺五寸五分

右ノ二潮差ハ高漲二百十回及卑漲二百十回ヲ平均シテ得タル者ナリ

比
卑潮
||
低潮

別宮川の川口は、諸川口のうち、川・海の間航行が最も便利である。その理由は、主として水深が最も大きいことにある。川口外の沙灘の上は干潮時の水深四尺を越えず、満潮時には水深約八尺である。

津田川(新町川)の川口は、諸洲嶼の右側(南側)に開いている。

ここも川口内ではやや深いが、川口外の沙灘では低水トわずかに一尺二寸であることを私は測量をして知った。この川口は桂川(勝浦川)より土砂を流下するのが多いので水路を塞いでしまう。

潮汐のこと

海岸では、一日に二回満潮があり、一回は大変高いが、他の一回はそれに及ばない。

その程度を、津田水位尺で得た結果は次の通りである。

日々の高潮時の潮差は、三尺九寸一分
日々の低潮時の潮差は、二尺五寸五分

この潮差は、高潮二一〇回、低潮二一〇回を平均して得た数字である。

※1 川口の外の川口の海外か

※2 津田水位尺七ページ参照

511

5/k